

北九州市立大学 F D活動報告書

2022年度

FD研修 報告

実施したFD研修を振り返ることができます。

授業のピア レビュー報告

全87本の授業の各種FD活動を学ぶことができます。

【特集】

各学部・学群長が推す授業は、
どんなFDを行っているのか？

北九州市立大学 F D委員会



2022 年度FD 活動報告書

目次

1. はじめに	1
2. FD 研修報告	
(1) 春季新任教員研修	3
(2) 夏季新任教員研修	5
(3) 「対面授業再開を受けた学修行動と学生生活の経年比較」	8
(4) 「FD 活動を学内外へ可視化する試み」	
『環境問題事例研究』での取組	10
3. 授業のピアレビュー報告	
(1) 授業のピアレビュー概要	13
(2) 2022 年度ピアレビュー実施状況	13
(3) 各部局の取組状況	14
4. 【2022 年度 特集記事】	
各学部・学群長が推す授業は、どんな FD を行っているのか？	33
5. FD 委員会について	
(1) 活動概要	43
(2) 活動一覧	44
(3) 委員構成	46
(4) 委員会議事録	46

※Web ページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第 1 章

はじめに

はじめに

副学長（教育・FD 担当）
FD 委員会委員長 柳井 雅人

2022 年度の授業は新型コロナに対応しながら原則対面とした。180 名を超えるものについては引き続き遠隔授業としたが、対面授業の比率は 96.5%という高い水準になった。（授業クラス基準による比率）卒業単位数における遠隔授業数の比率の制限がある中、対面授業のメリットを前面に出した対応となっている。ただし遠隔授業によるものも、学生自身の復習や理解の困難な部分の反復学習、ビデオ教材ならではのビジュアルな利点もある。そのため授業の中でも創造的なものについては審査の上、オンデマンド形式やライブ形式の授業形態を承認した。今後、対面授業と遠隔授業の双方のメリットを活かした授業の在り方が議論されていくのであろう。

元来、本学においては学部や組織の創意工夫を重視した「ボトムアップ型」という特色ある FD 活動を堅持し、認証評価や法人評価で高い評価を受けてきたところである。ここでは、FD（授業改善）活動が、教育の質的改善と質の高い人材育成を行うための重要なツールであるという認識がある。その手法について可視化するとともに、FD の成果を教職員全体で共有しながら、実践的に活用していくものにしていく必要がある。つまりこの活動自体が内部質保証を高度に保つための重要な作業となっているのである。

この考え方に基づく FD 研修も、新型コロナへの授業対応を受けて、その総括と今後の展望などを中心として行うこととなった。主な研修内容としては「対面授業再開を受けた学修行動と学生生活の経年比較」（2022. 9. 22）、「FD 活動を学内外へ可視化する試み」（2023. 3. 1）、「『環境問題事例研究』での取組」（2023. 3. 1）、が実施された。

授業評価アンケートについては、Moodle を活用することにより、学生が遠隔操作で入力するようにしている。講義中に入力作業をお願いしているが、それでも回答率が伸び悩んでいることが課題として浮き彫りになっている。またその結果について、教員がコメントを回答しているが、どの程度講義にフィードバックされているのか、さらに分析していく必要がある。2023 年度からは新学務システムが本格稼働していくので、この点も新しい状況の中で検証をしていく必要があろう。こうしたことも含めて、本学における FD 活動は曲がり角に来ていることも事実である。教職員は内発的に FD 活動の必要性を感じて、主体的・自律的に取り組み、参画することを前提としながらも、大学全体として組織的に検証、改善提案する体制を充実させていくべきである。

大学の組織体制としては教育改革推進室を軸として、教学 IR 室の整備やアセスメントプランの策定を終了しており、これを土台として教育現場の質的改善と向上をめざすサイクルが出来上がっている。教育の質的改善を図るために、教職員の認識が一致するよう、FD 活動を一層深めていく必要があろう。

最後に、愛媛大学から FD アドバイザーとしてご就任していただいた竹中喜一先生には、1 年にわたり熱心な FD 活動へのご協力を賜ってきた。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。

第 2 章

FD 研修報告

(1) 春季新任教員 FD 研修

■ 日 時：2022 年 4 月 8 日（金） 9:00 ～12:00

■ 場 所：オンライン・ライブ方式（Zoom）

■ 研修テーマ：授業設計の基本－1 コマの授業設計

■ 研修講師：竹中喜一（FD アドバイザー）

■ 研修のプログラム：

時間	内容
9:00～9:10	オリエンテーション
9:10～10:00	授業設計の基本（講義）
10:00～10:10	休憩
10:10～10:40	90 分の授業計画案の作成（演習・個人ワーク）
10:40～10:50	休憩
10:50～11:50	模擬授業とピア・レビュー（演習・ブレイクアウトルーム）
11:50～12:00	まとめと振り返り

■ 参加者数：新任教員 13 名、メンター 8 名、他 5 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

研修の到達目標は「さまざまな授業方法の特徴を理解し、学習目標に適した授業方法を選択できる」、「学生の学習を促す 90 分の授業の計画を作成できる」、「作成した授業計画案にもとづいて模擬授業を実践できる」の 3 点と設定された。研修当日は講義科目に焦点をあてた授業設計の基本についての講義があった。主だった内容は、「アクティブラーニングと講義法」、「導入・展開・まとめ」、「説明・発問・指示」についてである。その後、90 分間 1 コマの授業計画を新任教員が個人ワークとして作成した上で、新任教員とメンターから構成されるグループ（4 人程度）に分かれ、模擬授業とピアレビューが行われた。また授業設計や模擬授業に関するグループディスカッションも行われた。

■ 研修結果とコメント

今年度の研修では、新任教員の授業開始を目前に、1 コマ 90 分の授業設計と実践をテーマに研修を実施した。全ての新任教員が参加した。新任教員研修のプログラムについて、以前より授業における具体的な実践方法が知りたいとの要望やグループディスカッションの量を増やしてほしいとの要望などがあった。今回の研修では基本的な授業に関する講義は 1 時間程度とし、残る 2 時間は授業実践にあたっての個人ワーク、模擬授業、グループディスカッションの時間に充てた。また新任教員と在籍教員をペアとして、1 グループ当たり 4 人程度のグループ編成とした。新任教員が他分野の授業実践を参考にすることができ、かつ、同分野の熟練教員からのアドバイスが得ることができることが狙いである。

研修後のアンケート回答数は 19 名（新任教員やメンターなど）であった。アンケートによると、すべて肯定的な評価であり、「大変よかった」が 13 名、「よかった」6 名であった。また自由記述においても多くの肯定的なコメントがみられた。

(2) 夏季新任教員 FD 研修

■ 日 時：2022 年 8 月 18 日（木） 9:00 ～12:00

■ 場 所：オンライン・ライブ方式（Zoom）

■ 研修テーマ：授業設計の基本—15 回の授業設計と 1 学期の授業の振り返り—

■ 研修講師：竹中喜一（FD アドバイザー）

■ 研修のプログラム：

時間	内容
9:00～9:10	オリエンテーション
9:10～9:50	15 回の授業設計（講義） ・ 授業設計の基本 ・ 授業全体の構造
9:50～10:00	休憩
10:00～10:40	シラバス作成の基本（講義） ・ シラバスの作成方法
10:40～10:50	休憩
10:50～11:50	1 学期の授業の振り返りとピア・レビュー（演習・ブレイクアウトルーム） ・ 1 学期の担当授業（1 科目）について ① 授業の概要 ② 授業の工夫、うまくいった点 ③ 授業設計・運営上の課題、変えようと思っている点 ・ 1 人の持ち時間は 20 分×3 人 （発表 10 分+他の参加者からのコメントや質疑応答 10 分） ・ 受講者 3 人（もしくは 2 人）+メンター1 人以上が各ブレイクアウトルームに入る
11:50～12:00	まとめと振り返り

■ 参加者数：新任教員 11 名、メンター9 名、他 5 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

研修の到達目標は「授業全体に構造をもたせた設計を行うことができる」、「シラバスの役割と作成のポイントを説明することができる」、「1 学期の授業を振り返り、成果と課題を言語化することができる」の 3 点と設定された。事前課題として、1 学期に担当した科目のうち、①授業の概要、②授業の工夫、うまくいった点、③授業設計・運営上の課題、変えようと思っている点、について説明できるようにするようにとの指示があった。研修当日は、15 回の授業設計やシラバス作成に関する講義を行い、事前課題を踏まえ、メンターを加えたグループ別に 1 学期に実施した①授業の概要、②授業の工夫、うまくいった点、③授業設計・運営上の課題、変えようと思っている点などの発表が行われ、参加者からのコメントや質疑応答等も含めたディスカッションが行われた。

■ 研修結果とコメント

今年度の研修では、本学における 1 学期の授業が終わった新任教員を想定し、今学期授業の振り返りと、次年度に向けて 15 回の授業設計やシラバス作成について、をテーマに研修を実施した。新任教員研修のプログラムについて、以前より授業における具体的な実践方法が知りたいとの要望やグループディ

スカッションの量を増やしてほしいとの要望などがあった。今回の研修では基本的な授業に関する講義のほか、1時間は新任教員とメンターによって構成されるグループに分かれての、授業実践の発表とグループディスカッションの時間に充てた。グループ編成は、新任教員が他分野の授業実践を参考にすることができ、かつ、同分野の熟練教員からのアドバイスが得ることができることを狙い編成した。

研修後のアンケート回答数は18名（新任教員やメンターなど）であった。アンケートによると、否定的な評価はなく、「今後の教育活動の参考になりましたか」という問いに対して、「非常に参考になった」が8名、「参考になった」10名であった。また自由記述においても多くの肯定的なコメントがみられた。

(3) 第1回 全学FD研修

■ 日 時：2022年9月22日（木）13：00～14：00

■ 形 式：オンライン・ライブ方式（Teams）

※後日オンデマンド配信

■ 主 催：FD委員会（教育改革推進室 教学IR推進部門 提供）

■ テー マ：「対面授業再開を受けた学修行動と学生生活の経年比較」

■ 講 師：古川洋章 先生（齋藤朗宏 先生）

■ プログラム

1	開会のあいさつ	FD委員会 委員長 柳井雅人 先生
2	報告（40分）	情報総合センター 古川洋章 先生 *経済学部 齋藤朗宏 先生による代理発表
3	質疑応答（10分）	

■ 参加者数：222名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	30名
経済学部	22名
文学部	31名
法学部	26名
地域戦略研究所	6名
国際教育交流センター	3名
地域共生教育センター	1名
情報総合センター	1名
大学院マネジメント研究科	9名
基盤教育センター（北方）	26名
基盤教育センター（ひびきの）	9名
エネルギー循環化学科	10名
機械システム工学科	8名
情報システム工学科	12名
建築デザイン学科	10名

環境生命工学科	10 名
環境技術研究所	3 名
その他（学長、特任教員）	5 名

■ 研修の概要

昨年度「データで見るコロナ禍における本学学生の学修時間、学修相談、学生支援～2020 年度学修行動調査結果より～」という題目で研修を実施した（2021 年度第 3 回 FD 研修）。今回の研修では、2020 年度と 2021 年度学修行動調査結果との経年比較からわかることを報告する。対面授業や学生の課外活動が緩やかに再開される中で、学修行動と学生生活がどのように変化しているかを検討する。

■ 実施結果

本研修の参加者数は 222 名であった。本研修の結果、昨年度に引き続いて、データに基づき学生の行動傾向について考える機会となった。アンケートへの回答数、および自由記述の回答数と回答分量が大変多く、関心の強さがうかがえた。「今後の教育活動の参考になりましたか」という質問に対する回答として「非常に参考になった」37 名、「参考になった」141 名と肯定的な回答が多かった。研修は概ね良好に運営できたと評価できる。

(4) 第2回 全学FD研修

■ 日 時：2022年3月1日（水）13：00～14：00

■ 形 式：オンライン・ライブ方式（Teams）

※後日オンデマンド配信

■ 主 催：FD委員会

■ 第1部テーマ「FD活動を学内外へ可視化する試み」提供：地域創生学群

講師：見舘 好隆先生（本学地域創生学群）、廣川 祐司 先生（本学地域創生学群）

■ 第2部テーマ「『環境問題事例研究』での取組」

講師：村江 史年 先生（基盤教育センターひびきの分室）

■ プログラム

1	開会のあいさつ	FD委員会 委員長 柳井雅人 先生
2	第1部報告・質疑応答（40分）	見舘 好隆 先生、廣川 祐司 先生
3	第2部報告・質疑応答（20分）	村江 史年 先生

■ 参加者数：132名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	20名
経済学部	17名
文学部	15名
法学部	13名
地域戦略研究所	4名
国際教育交流センター	2名
地域共生教育センター	0名
情報総合センター	0名
大学院マネジメント研究科	4名
基盤教育センター（北方）	17名
基盤教育センター（ひびきの）	9名
エネルギー循環化学科	6名
機械システム工学科	6名
情報システム工学科	5名

建築デザイン学科	5 名
環境生命工学科	4 名
環境技術研究所	1 名
その他（学長、特任教員）	4 名

■ 研修の概要

第1部「FD活動を学内外へ可視化する試み」・・・見館先生・廣川先生

多くの教員による自主的なFD活動や学生主体のFD活動も多く存在しているが、現在、それらの活動を通じた授業改善のための情報が学内外で十分に共有されているとはいえない。これらの情報は、教員間で共有されることで授業改善が促進するとともに、学生や高校生の授業への関心を高めることにつながるのではないだろうか。この研修では、そのための地域創生学群の試みを報告する。

第2部『『環境問題事例研究』での取組』・・・村江先生

今年度は若松区より課題を提供してもらい、学生達が53のグループに分かれて調査研究を行った。大人数の講義において、どのような設計をすれば一方的な講義にならずに主体的な学びを提供できるのか。模索を続ける中で、現時点での取組について報告する。

■ 実施結果

本研修は任意参加であったが参加者数は132名と多かった。アンケートへの回答数、および自由記述の回答数と回答分量が大変多く、関心の強さがうかがえた。「今後の教育活動の参考になりましたか」という質問に対する回答として「非常に参考になった」41名、「参考になった」64名と肯定的な回答が多かった。研修は概ね良好に運営できたと評価できる。学部のFD活動や授業の実践的な内容であったためか、各教員のアンケートにおける自由記述欄のコメントは、各部局、各教員のFD活動や授業へ研修内容にフィードバックすることを視野にいったコメントが多かった。

第3章

授業のピアレビュー報告

(1) 概要

以下に示す授業のピアレビュー実施状況と報告は、今年度における各部局各学科等で行われたピアレビュー活動の報告である。“授業のピアレビュー”活動は、教員相互の授業公開・参観・授業改善のためのミーティングを含んでいる。

(2) 実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	6
	中国学科	1
	国際関係学科	2
経済学部	経済学科	11
	経営情報学科	
文学部	比較文化学科	4
	人間関係学科	2
法学部	法律学科	3
	政策科学科	2
地域創生学群	地域創生学類	4
国際環境工学部	エネルギー循環化学科	6
	機械システム工学科	4
	情報システム工学科	11
	建築デザイン学科	6
	環境生命工学科	6
基盤教育センター	教養教育部門	10
	語学教育部門	
	ひびきの分室	
社会システム研究科		1
法学研究科		2
マネジメント研究科		6
合計		87

(3) 各部局の取組状況

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科
--------	-----	-------	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

各教員が学期に1度、お互いの授業を見学しあうピア・レビューを実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	English for Core Program	1	168	11			
2	Cross-Cultural Field Work	1	5	12			
3	Travel Cultures	1	115	13			
4	Global Research Project	1	83	14			
5	Language Teaching	1	15	15			
6	社会システム総合概論	6	15	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

I liked the idea of providing a handout to all the students so they could follow the progression of the lecture. I also noticed that the slides had big, legible font sizes facilitating reading from the rear of the classroom. / Providing students with a few choices of ideas might be a good idea when dealing with difficult topics. / 講義全体の構成、事前配布資料の形式、主題へのアプローチ方法の観点から大変参考になった。

5. 成果と課題

従来型の対面授業に加え、オンラインの要素が一層工夫して取り入れられていることがうかがえる。授業運営に関わる教員間の意見交換や情報交換の機会として、英米学科のピアレビューは大きな成果を挙げたと言える。来年度以降も継続していきたい。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	中国学科
--------	-----	-------	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

中国学科の教員数が少ないため、ピアレビューは年1回（通常は2学期）実施することとなっている。基本的に、①手を挙げる教員が実施授業を決める；②FD委員をはじめ、学科長及び学科教員が参加する；③FD委員が作成した報告書を学科会議で報告する。

今回は学科長が授業を提供し、学科教員3人が参加した。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	中国語中級総合Ⅱ	3	15	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

・テキストの文章は日本でも有名な中国の古典を題材とするもので、学習者の関心をそらさない工夫がなされていた。講義では文法、発音及び用法についての説明に工夫が凝らされ、また説明の言い換えなども諸所に取り入れられており、これらは学生に実践的な中国語力を身に着けるために効果的であろう。また、文章の情景や背景説明も併せて行われ、これも中国文化に対する学生の理解を深め、且つ教養を深める重要な機会にもなっていた。

・学習効果を確認するための小テストは、「理解力」だけでなく、「応用力」も高めるために設問を工夫した。

・PPTが非常に丁寧に作られており、学生が熱心にメモを取っているのが印象的であった。

5. 成果と課題

辞書通りに文章を訳すのではなく、物語の背景や人物関係なども十分考慮し、より適切な訳し方を工夫していたことや丁寧にわかりやすく説明する方法、「理解力」と「応用力」を高めるための設問の工夫など、見習うことが多かった。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科
--------	-----	-------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

- ◆対面授業の全面開始を受けて、すべての専門科目をピアレビューの対象と定め、原則として少なくとも年2回にわたりレビューを実施することにした。
- ◆講義の質向上に重点を置き、ピアレビューに臨むこと。
- ◆今後、非常勤講師に対しても、ピアレビューへの参加を促す。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	国際関係概論	3	90	11			
2	国際関係の争点	2	113	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ◆学生の興味関心を引くようなアクチュアルな講義テーマの設定、講義主題の適切かつ有効な伝え方、聴講者の集中力を持続させる授業構成、視聴覚教材の有効利用の仕方など、授業の質向上に向けた多角的な意見・感想が多く出された。
- ◆学科の全教員がレビューの結果を共有することで、授業担当者（被レビュー者）の講義内容や授業方法に対する知見を把握・改善するとともに、更なるフィードバックをも図ることができた。

5. 成果と課題

- 成果：
- ◆専門科目をレビュー対象に据え、レビューを定例化するという学科の目標を取り合えず達成することができた。
 - ◆ピアレビューの実施により、各教員の講義の質向上への関心も高まったと思われる。授業担当者は勿論のこと、レビューアーにとっても自身の授業実践を振り返る場となったと思慮する。
- 課題：
- ◆ピアレビュー参加率が依然として低い。今後のピアレビューではより積極的な参加を促す必要がある。加えて、講義全体を通して参観することでさらに有意義な活動になることが期待される。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	経済学部	学科等	経済学科／経営情報学科
--------	-----	------	-----	-------------

2. 部局の実施方針、方法

各教員に対し、各学期1回以上のピアレビューの実施（1枚以上のピアレビュー報告書の提出）を依頼している。
ピアレビューの機会として、新任教員の担当講義をオープン・ピアレビューとして設定しているほか（今年度第2学期はメディア科目である「キャリア開発Ⅰ」および「キャリア開発Ⅱ」もオープン・ピアレビューの対象とした）、入門演習プレゼンテーション大会（第1学期）やポスターセッション大会（第2学期）、他大学との交流ゼミなどもピアレビューの対象としている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	入門演習（経済学科）	3	150	11	合同ゼミ（中村学園大学・県立広島大学・福岡大学）	1	60
2	入門演習（経営情報学科）	5	150	12			
3	企業ファイナンスⅠ	3	100	13			
4	経済学特殊講義A	3	30	14			
5	マクロ経済学入門	1	28	15			
6	Statistics 110	1	—	16			
7	ポスターセッション大会	10	72	17			
8	専門演習Ⅱ	2	20	18			
9	キャリア開発Ⅰ	1	300	19			
10	合同ゼミ（下関市立大学）	1	28	20			

4. 出された主な意見、コメント

講義系科目においては、学生の興味・関心を引き出す取り組み（時事的なトピックを取り上げる、学生の身近な事例に引き付けて説明する）や学生の集中力を途切れさせないようにする取り組み（講義と演習を適宜切り替える）などについて参考になったとの意見が多く出された。また、複数教員で協働して実施している科目においては、授業を通じて互いの教育内容な教育スタイルを学び合う機会になったという意見も出された。
演習系科目においては、他のゼミの報告内容や報告資料の作り方、発表の方法などから自身の授業改善につながるヒントを得たとのコメントが多かった。

5. 成果と課題

ピアレビューを実施いただいた（ピアレビュー報告書を提出いただいた）先生方は概ね他の先生方の授業から自身の授業改善につながるヒントを得ておられ、FDとして授業の質向上に資する活動が行えたと考えている。
一方で、昨年度も課題として挙げた教員間でのピアレビュー実施状況の濃淡については、今年度も同様の傾向が見受けられた。
FD委員として、ピアレビューの機会を増やすなど、より多くの先生方にピアレビューを実施していただけるような環境づくりに努めたいと考えている。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

- 高校生向けに学問や大学での学びについて噛み砕いて紹介する「模擬授業」@オープンキャンパスをレビュー対象とすることで、聴講者の性質に合わせた肌理の細かい授業の構成・実践や、学外向けの本学（本学科）PR法について、意見交換とスキルアップを目指している。
- 外部講師を招いての「特別講義」も積極的にピアレビューの対象に組み入れ、普段コミュニケーションや意見交換ができない人材とも、FDの観点からの交流を図っている。
- 新任教員の授業を既在籍教員が聴講し、意見交換（場合によっては助言）している。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	オープンキャンパス模擬授業A	2	114	11			
2	オープンキャンパス模擬授業B	2	109	12			
3	比較文化入門1	1	150	13			
4	日本文学概論	4	65	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- 聴講者を話に引き込み、途中では笑いとともに一息つかせ、しかし最後は講義の要旨を再確認して学びの充実度を増すような、周到に用意された授業構成について、好意的な意見が寄せられた。
- パワーポイントやレジュメなどの授業資料についても、その適確さを支持する好意的な意見が主だったが、さらなる改良の余地も示され、有意義な意見交換が実現した。
- 大学院生による特別講義もレビューの対象になっており（「日本文学概論」）、その際は、新人講師のその後において益となるような、励ましも込めた前向きな助言もレビュアーから寄せられた。

5. 成果と課題

- 普段の授業とは受講者の性質が異なる、高校生向け「模擬授業」をレビュー対象とすることで、学外の初学者に向けた語りかけがどうあるべきなのか、部局内で有意義な意見交換ができた。
- 新任教員の授業を既在籍教員が聴講しレビューすることで、教室での具体的な悩みや苦勞を共有し、意見交換するきっかけにもなり、その後のコミュニケーションの促進にもつながった。
- 非常勤講師のFD参加を目指していたが、今年度は実現しなかったため、次年度の課題として持ち越す。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

昨年度より実施方針を「人間関係学科の知の継承を中長期的に図るべく、ピアレビューを通してベテラン教員の授業のノウハウを、主に若手教員が学ぶ機会を設ける」という方針に改め、運用してきたところであるが、昨年度のピアレビューが若手教員に好評だったことから、今年度もその方針を引継ぎ、ベテラン教員のピアレビューを学期ごとに実施することとする。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	教育学概論	4	87	11			
2	カウンセリング論	4	107	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・学生コメントへの丁寧な回答が、学生の授業への動機付けを高めている。
- ・他人事ではないリアリティーが感じられ、非常にインパクトが強かった。(中略) 学生たちの今後の人生に大きな影響を与える可能性がある授業だった。
- ・常に学生に問いかけており、内容もわかりやすく、学生らもよく反応していて、高い学習効果が得られている。
- ・学生の発言からはこれまでの授業の積み上げが感じられた。
- ・私は授業で一般論を解説することがほとんどで、実際の事例を挙げて解説することが苦手だが、自分の授業でももう少し事例を挙げながら紹介できるところがないか検討したい。
- ・人間関係学科に不可欠な授業内容であると感じた。など

5. 成果と課題

「ベテラン教員の授業を若手教員が学ぶ」ことをコンセプトにピアレビューを実施したが、ベテラン教員のノウハウ(学生のモチベーションの保ち方やテキストの活用方法、アクティブラーニングの構造化等)を学ぶことで自身の授業の改善を図る契機になっただけでなく、洗練された深みのある授業を若手教員が体感することで、学びの原点を再確認できたように思われる。「人間関係学科に不可欠な授業内容である」というコメントも聞かれたように、人間関係学科の知の継承にも繋がった。近年はベテラン教員によるピアレビューが中心だが、かつてのように新任教員によるピアレビューも組み込みながら、引き続き有意義なピアレビューの場を設けたい。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	法律学科
--------	-----	-----	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されており、両学科ともに共通の実践を展開する事が多い。
FDのピアレビューに関してもこの法学部の伝統に則り、各学期・各学科から1科目を選んでピアレビューを実施することを原則としている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	憲法機構論	1	290	11			
2	行政法総論	1	287	12			
3	紛争処理論	2	5	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・政治的なトピックや憲政史にも触れることで、統治機構に関する憲法規定（や制度）が実際の政治の場面でどのように活用されているか・影響しているかがよくわかる内容となっており、学生の興味を惹くものだったと思われる。統治機構に関する授業設計についてとても参考になった。
- ・授業冒頭で、公務員試験の問題を活用した課題（復習）が行われており、公務員志望者の履修が多いであろう本科目の受講生のモチベーション維持にもなるような工夫がなされていた。自分の授業でも取り入れたいと思った。
- ・配布資料の内容や先行研究について具体的な事例で説明されており、とても分かりやすかった。

5. 成果と課題

2022年度は、新任教員を中心にピアレビューを実施した。1学期は、オンデマンド授業のピアレビューを実施し、2学期は、対面授業のピアレビューを実施した。いずれにおいても、授業設計や具体的な授業方法の工夫について、多数のよい部分が共有され、授業改善の契機となったものと思料する。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	政策科学科
--------	-----	-----	-----	-------

2. 部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されており、両学科ともに共通の実践を展開する事が多い。
FDのピアレビューに関してもこの法学部の伝統に則り、各学期・各学科から1科目を選んでピアレビューを実施することを原則としている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	民主主義とは何か	3	45	11			
2	政策実践プロジェクト I	1	2	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・授業冒頭に前回授業後に行われた「小アンケート」の結果公開を行い、フィードバックがなされており、受講生も関心を持ちやすかったのではないかな。
- ・授業の前段で「本日理解してほしいことは3点」といったかたちで、授業の目標が明確に示されていた。
- ・内容としては高度なものもあったが、教養科目という性質もあり、深い知識がない学生にも抵抗なく受講できるように工夫がなされていた。
- ・活発に質問が出ていたのがよかった。
- ・学外演習活動（学生による国際交流イベントの企画・運営）を通じて、日本に住む外国人の多様な側面を知り、実態を踏まえた政策検討を行う力を身につけることができると感じた。

5. 成果と課題

2022年度は、新任教員や若手教員を中心に、ピアレビューを行った。特にアクティブ・ラーニングを活用した好事例をピアレビューすることにより、アクティブ・ラーニングの実践的な工夫が共有され、非常に有意義なピアレビューになったと思料する。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類
--------	-----	--------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

ピアレビューを学内外に可視化することで、教員のFD活動促進と同時に、学群以外の教員、職員に対しての認知、さらに学外の大学教員や、高校生、高校の教員に広報すること目的を行うことを教授会で承認を得、今年度は、FDの工夫を行って実施しつつ、学群での学びを代表する4つの授業を選択した（教授会承認）。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	地域創生実践Ⅰ・Ⅲ（山本）	1	31	11			
2	地域創生論4（まちづくり実践論）	2	88	12			
3	地域創生実践Ⅰ・Ⅲ（眞鍋）	1	18	13			
4	スクール(学校)ソーシャルワーク論	1	5	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

いずれも知識と現場を接続して理解を深める工夫がされていた。
①は、地域の障がい者の皆さんと一緒にすることで、座学では到底実感できない障がい者との協働の本質を学ぶ工夫があった。②は、ご自身がまちづくりのプレイヤーであるため、例えば現在参加している「北九州市観光振興プラン検討会」の会議資料を紐解きながらの講義で物凄い臨場感があった。③は、小倉西高校の総合的な探究の時間の運営を学生に全て任せることでアクティブ・ラーニングを実現する工夫があった。④は、学校主催ではなく、PTA主催のイベントに参加することで、学校以外の副次的な視点でみた学校の課題を学ぶ工夫がされていた。

5. 成果と課題

2022年度は4つの授業にとどまったが、これから本活動を継続して、いずれはすべての専門科目を可視化し、FD活動および広報活動に繋げていきたい。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	エネルギー循環化学科
--------	-----	---------	-----	------------

2. 部局の実施方針、方法

各曜日で公開することで教員の聴講を容易にした。多岐な講義内容で聴講できるよう、1-3年次に亘って工学基礎・専門の科目を公開した。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	統計学【化学】	5	51	11			
2	有機化学II【化学】	1	66	12			
3	高分子化学	1	67	13			
4	化学工学【化学】	5	54	14			
5	生物反応工学	1	37	15			
6	環境物理学	3	14	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

講義内容、進行などについて大きな問題の指摘はなかった。講義の工夫について、授業の途中に簡単な演習問題を与えて学生に飽きさせないこと、板書や手描き図を学生に分かりやすいものとする工夫がなされていること、具体的な事例に基づき印象的な写真を示して講義進行をおこなっていること、などのコメントが多かった。

5. 成果と課題

各講義で共通して、教員がおこなっている授業に対する工夫がピアレビューを通じて他の教員が知ることができたことが大きな成果だった。しかしながら本学でピアレビューを始めてから数年が経過したため、実施が形骸化し、教員の熱意も薄れている。新規雇用の教員向けを別として、制度を再設計する時期に来ていると思われる。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	機械システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

学外でのより効果的な学科紹介への貢献を基本方針とした。授業評価アンケート結果や過去のピアレビュー担当状況も勘案して、基本的に学部3年次の専門科目から講義、演習、実験科目を選定し、4つの授業についてピアレビューを実施した。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	機械工学実験I	9	44	11			
2	伝熱工学・同演習	10	44	12			
3	計測学	11	46	13			
4	ロボット工学	6	36	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

良かった点：

- ・動画資料が事前にmoodleに掲載されており、予習時やレポート作成時に確認することができた。
- ・他科目の内容と関連づけた説明があり、教育上好ましい。
- ・「式の物理的なイメージ」という概念は、学生の理解の助けになって分かりやすい。
- ・テキスト以外も使用して、実験の意義・位置づけを説明し、学生の理解を助けている。
- ・毎回小テストを行い、学生の理解度を確認しながら授業を進めていた。

改善が求められる点：

- ・板書に時間を取られ過ぎて、学生の状況確認がやや少なめになっていた。
- ・次回授業にどのように発展するか説明があれば、モチベーションがより上がるのでは思った。

5. 成果と課題

今年度のピアレビューへの学科教員の参加率は100%を達成し、多くのコメントが寄せられた。各公開科目において、参観者からのコメントは概ね高評価であり、学生の理解を促す工夫がなされていた。また、電子媒体の資料を活用されている授業が目立ち、広報活動にも展開しやすい状況にあるのかと考える。紹介資料等への具体的な応用手段の検討は今後の課題としたい。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

各教員が年間で1科目以上授業を公開し、各学期で1科目以上参観することを原則とする。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	線形代数学 I	3	92	11	視覚情報処理	1	13
2	電磁気学【情報】	3	81	12			
3	情報数学	1	88	13			
4	通信工学	4	62	14			
5	ネットワークとセキュリティ	2	66	15			
6	論理回路	1	82	16			
7	理工学基礎演習	1	25	17			
8	電子回路	2	81	18			
9	システムモデリング	4	59	19			
10	システム制御 II	1	62	20			

4. 出された主な意見、コメント

各授業の実施状況は概ね良好であるとの意見であった。

細かい点で改善点を提案する建設的な意見・コメントが多く見られた。

例としては、次のとおりである。

聴講学生に問いかけることを積極的にした方がいい、講義内容が少々易しすぎる、講義スライドの字が小さい箇所がある、技術的には少し難易度が高い印象がある、講義内容に数式が多すぎる、授業中盤以降で集中力の切れている学生がいる、プロジェクター画面のちらつきが発生している、内容を言い方を変えて3回繰り返すのは良いが学生によっては混乱するかもしれない

5. 成果と課題

ピアレビューを開始した当初に比べて、授業のレベルは年々確実に向上しており、いくつか改善すべき点はあるものの、授業評価アンケートでの評価が低い科目であったとしても、提供している授業のレベルに関して良好な状況であることを確認できた。一方で、教員にとってはピアレビューの取り組みそのものに関してマンネリを感じていることは事実である。今後どのように本学科でピアレビューを進めていくのか、マンネリ感を解消する手立てはあるのかについて、議論していく必要があるかと考えている。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	環境国際工学部	学科等	建築デザイン学科
--------	-----	---------	-----	----------

2. 部局の実施方針、方法

本学科のピアレビュー方針は、

「可能な限り大学院や授業評価アンケートの高い授業のピアレビューを行う」

である。なお、概ね以下の方法でピアレビューを実施した。

- 1) 授業公開する教員（公開教員）は、授業公開を告知するとともに、重点項目設定シートに基づいて重点項目およびその具体的な取り組み内容を決める。
- 2) 授業を参観する教員（参観教員）は、公開教員が作成した重点項目設定シートに基づいて、公開された授業に対する評価を行う。
- 3) 公開教員は参観教員の評価に基づいて実施報告書を作成する。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	見学WS演習 I	2	57	11			
2	環境工学実験	1	53	12			
3	設計製図Ⅲ	1	47	13			
4	環境設備実験	1	15	14			
5	建築景観デザイン工学	1	56	15			
6	建築材料実験	1	57	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

出された主な意見は、以下に示すような（一例）、肯定的な意見が多く見られた。

・3年生ではあるが、一部の学生はすでに卒業設計レベルの作品を作っていた。これまでの学びと技術がよく身についていることが分かり、設計作品によって現す機会を提供していた。

・実験テーマである「換気」の目的や重要性について冒頭に説明があり、実験および解析（次週）の一連の流れについても授業の初めに解説していたので、学生にとって講義の位置づけが分かりやすい。

・月曜の本座学と金曜の演習科目の連動をすることで、頭による理解と手による創造の連動を意識させている。建築を構想する上で必要な基礎能力への有益なトレーニングと位置づけられる。

5. 成果と課題

今年度のピアレビュー参加率（92.3%）は、昨年度（2021年度、100%）に比べて、やや下がったものの、比較的に高いほうであったかと思う。継続的に、各教員がより良い授業運営に対して意識を高く持っていることが伺える。評価コメントをみると、一つの科目のみならず、他の科目と連携させて、学生の理解を深めるための工夫がされているなど、多くの科目においてそれぞれ工夫が行われていた。

次年度以降、前述のような「高い参加率」や「高評価コメント」を維持していくことが課題の一つとしてあげられる。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境生命工学科□
--------	-----	---------	-----	----------

2. 部局の実施方針、方法

授業設計についてピアレビュー実施前に周知させた上での授業公開を実施する。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	環境生命入門実習	6	48	11			
2	基礎物理化学□	3	49	12			
3	遺伝子工学	3	34	13			
4	生命有機化学□	2	20	14			
5	環境シミュレーション□	1	22	15			
6	化学熱力学□	1	50	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

複数のスタッフ（教員、EA、TA）側から積極的に対話を進めることで、手順や操作などに対する学生の不安が解消され、丁寧な実技指導ができる体制となっている。□

□

スキルの定着性に配慮されたプログラム（アウトプットシートの導入など）であった。□

自主学習が促進される仕組みづくりができていた。

講義の位置づけを明確にしてから、講義の本題に入るなど分かりやすい説明を心がけた講義となっていた。

5. 成果と課題

本学科の特色を示す分野横断的な科目も含め複数の科目でピアレビューを実施した。オムニバス形式の講義では、同一のトピックであっても研究分野が異なればその紹介の仕方も異なってくるため、多くの教員が参加し、教育方法を共有することでより有意義な議論が可能となる。学科のほぼ全教員が授業公開・参観をしているものの、各回における参加人数は少なかったことから、今後のピアレビューではより積極的な参加を促す必要がある。また、関連科目を担当している教員などが参観することでさらに有意義な活動になることが期待される。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	基盤教育センター	学科等	
--------	-----	----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

実施方針

積極的にピアレビューを推奨している。他教員のアクティブラーニング等の取り組みや授業外学習の実施方法などを参考にする。

実施方法

各教員が任意に連絡を取りながらピアレビューを行っている。相互に情報提供と意見交換を行うことで、教育力向上に努める。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	アカデミック・スキルズⅠ	1	46	11			
2	Communicative EnglishⅣ	1	28	12			
3	Communicative EnglishⅣ	1	32	13			
4	Communicative EnglishⅣ	1	32	14			
5	データサイエンス入門	1		15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・PCトラブルへの個別対応の時間には、全体に対して声掛けを行った方が良い。
- ・The language input was varied. Good Moodle and Powerpoint usage. Various discussion topics were discussed. No high-pressure on students to talk.
- ・Making Murphy's video available online allows students to access it anytime outside of class. Also, the class has good usage of Moodle. Students' creation of their own videos is a good example of active learning.

5. 成果と課題

次年度以降も教員相互でピアレビューを行い、他教員の指導方法を参考にして教育力の向上に努める。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	基盤教育センター ひびきの分室	学科等	
--------	-----	--------------------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

実施方針

積極的にピアレビューを行い、他教員のアクティブラーニング等の取り組みや授業外学習の実施方法などを参考にしている。

実施方法

授業公開日をひびきの分室教員で共有し、教員が任意に連絡を取りながらピアレビューを行っている。相互に情報提供と意見交換を行うことで、教育力向上に努める。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	英語V	1	22	11			
2	考え方の基礎	1	198	12			
3	日本語の表現技術	1	98	13			
4	日本語の表現技術	1	98	14			
5	社会学習インターンシップ	1	12	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・対面講義に加えて、Moodleを用いた復習・予習など丁寧な作りこみがされている授業が多い。
- ・講義内で発表等の機会を作る際はTeamsを用いるなどして外部からも聴講できるように公開している。
- ・ピアレビューを行う教員の偏りがあるため、分室教員の全員が相互に実施できるようにする。

5. 成果と課題

次年度以降も教員相互でピアレビューを行い、他教員の指導方法を参考にして教育力の向上に努める。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	社会システム研究科	学科等	
--------	-----	-----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

(1) 方針：「社会システム総合概論」をピアレビュー科目として設定する。本科目は、「東アジア」「文化言語」「地域コミュニティ」「現代経済」専攻の教員（各1名）によるアクティブラーニング形式の授業である。科目の目的は、専門領域にのみ関心が向きがちな大学院生に各専攻の枠を超えた複合領域的な視点と発想を持たせることにある。その実践を改善するとともに、同様の視点を指導教員も確認する。

(2) 方法：院生が本科目の実施形式に慣れた段階（1学期後半）で各専攻からの教員によって実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	社会システム総合概論	5	16	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

・多様な専門分野の受講生の前で自身の研究計画を発表することは、受講生にとって非常に有意義で貴重な機会だと感じました。・他の大学院生の発表を聴き、院生や担当教員のコメントを聞くことは、これから研究に本格的に取り組む大学院生にとって非常に有意義な内容だったと考える。専門分野が違うからこそ、自身の研究の専門性をかみ砕いてわかりやすく伝えるトレーニングにもなっていたと思います。・質問やコメントに対する簡単な返答が多かったですが、時間が許すならば、そこから議論に発展させることができれば、更に学びが深まるようにも感じました。・報告書の作り方も、①よく練られているが研究テーマが広すぎる、②よく調べられているが研究計画が示されていない、③研究動機や問題意識がはっきりしているが具体的でない、と三者三様で、学生さんたちにとって研究計画書の作り方のポイントがわかるよいサンプルだったなと思います。・伊野先生のコメントにあった「他のゼミに出る」「周辺領域を勉強する」ということは、私も重要だと思いました。私もゼミ生に積極的に勧めるようにしたいと思います。

5. 成果と課題

(1) 成果：「社会システム総合概論」では「学生が互いがどんな研究をしているのかを知らない」「1年生の最初の学期は指導教員がいない」ことから3年前から授業を踏まえて受講生各自の研究計画の作成を行っており、これまでのピアレビューは教員の講義の回について行って来た。今回初めて学生の4回の報告のうち2回目についてピアレビューを行った。予想以上の発表内容であるとともにピアレビューに参加した教員にとっても予想以上の成果であった。

(2) 課題：受講生が質問したり、意見交換する時間を取れなかった。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学研究科	学科等	
--------	-----	-------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

平成29年度より法学研究科でもピアレビューを適切に実施することとしているが、現実問題として在籍している院生数が少なく加えて論文指導科目はピアレビューに適さない。よって各学期で1科目のみ実施することとしている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	法政総合演習	3	4	11			
2	行政学Ⅱ	2	1	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・哲学という一見わかりにくそうな議論も、図も交えての板書で説明されており、この分野の初学者でもわかりやすい内容だった。
- ・抽象的なテーマであればあるほど、教員の話し方の工夫や具体例を交えた説明が重要になることを実感した。
- ・留学生の理解度合を意識しながら授業進行することには工夫が必要になると感じた。
- ・受講者は問題意識をもって準備を行い、質疑応答のレベルも高いものであった。
- ・教員からは、板書を使った説明、コメント、発展学習のための参考図書の紹介などが行われたが、一貫してわかりやすく、ていねいな説明で、受講者の知的好奇心を引き出すことに成功していた。

5. 成果と課題

学問分野の特性に合った教育手法について情報共有がされた。法律学科教員と政策学科教員は、大学院レベルでの交流は少なく、大学院における教育手法の相互参照が行われたのはきわめて好ましいことであったと思料する。

大学院の授業は一般に人数が少なく、マンツーマンの場合が多いため、学修効果を上げるための環境設計に課題を残している。

2022年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	マネジメント研究科	学科等	
--------	-----	-----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

- ・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
- ・今年度のピアレビューは、基本的にはFD委員2人が分担して、新任教員の担当講義、今年度試行しているメディア講義を対象に実施した。
- ・ピアレビューの結果は、FD委員会で報告し教育内容・方法の改善を図ることとしている。
- ・また、平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	イノベーション戦略	1	18	11			
2	アカウンティング	2	22	12			
3	中国ビジネス	2	10	13			
4	地域産業と事業創造	1	16	14			
5	人材マネジメント	1	12	15			
6	ファミリービジネス	1	7	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・体系的・構造的に作りこまれた講義設計
- ・事例と関連するマネジメントの要素などの関係性が適切でわかりやすい
- ・関連する分野への言及
- ・もう少し双方向性を意識してほしい
- ・メディア講義については、授業方法や機材面など今後さらなる研究の必要がある
- ・授業最終回での課題発表などは有効な方法だと感じた。
- ・発表の時間コントロールによりクラス討議の時間を増やすなどの工夫を感じた。

5. 成果と課題

- ・新任教員の講義は、実務家教員はご自身の経験を、研究者は学術的な知見やご自身の研究をベースにした討議や解説など丁寧な講義をされていた。
- ・今後は学生の発言を促すなど双方向性を意識したり、ワーク、最終課題の発表などのアクティブ・ラーニングの要素を取り入れることで、さらに充実したものになると思われる。
- ・2学期から担当する特任教員が1学期に授業参観することは、ご自身の授業設計・進め方に役立っていたように感じた。特任教員にも参加していただき、全体としての講義レベルの向上を図りたい。
- ・メディア講義は、社会人を対象としたBSにとっては有効な方法だが、授業の進め方、機材などを含めて今後さらなる研究が必要と思われる

第 4 章

2022 年度 特集記事



特集

各学部・学群長が推す 授業は、どんな FD を 行っているのか？

各学部・学群長がイチオシする 魅力的な授業の FD 活動を徹底紹介！

従来、FD 委員会の FD 活動広報 WG の教員の人脈で、素晴らしい授業をピックアップしてきましたが、それと同じ教員ばかりになってしまいます。

そこで 2022 年度は、FD 委員会から、FD 活動広報 WG のメンバーが所属する学部・学群長へ依頼する形で、魅力的な授業を選出し、取材しました。

各教員の授業の工夫を是非、ご活用ください！

自らの授業を常に疑い、学生の
目線に立って改善し続けること

アダム・ヘイルズ 教授
(外国語学部英米学科)

「Introduction to Film,
Literature, and Theatre」

経済学、経営学、会計学、
情報科学を横断して
ビジネスを理解する。

畔津憲司 准教授（経済学部経済学
科）、浦野恭平 教授（経済学部経営情
報学科）、齋藤朗宏 准教授（経済学部
経営情報学科）、市原勇一 准教授（経
済学部経営情報学科）

「経済学特殊講義 A」

実践を通して外国人住民と
日本社会について考える

吉田舞 准教授
(法学部政策科学科)

「政策実践プロジェクト I」

ICT を使って反転授業に挑む
藤田慎之輔 准教授（国際環境工学部
建築デザイン学科）

「建築構造デザイン」

車椅子ソフトは、障がい者との
共生を育むために

生み出されたスポーツ

山本浩二 准教授（地域創生学群）

「地域創生実践 I・Ⅲ」

取材・編集：2022 年度 FD 委員会・FD 活動広報ワーキンググループ

胡玉華（外）、岡本舞子（法）、市原勇一（経）、柳川勝紀（国工）、見館好隆（地域研）



自らの授業を常に疑い、学生の目線に立って改善し続けること

アダム・ヘイルズ 教授(外国語学部英米学科) 担当「Introduction to Film, Literature, and Theatre」
履修者: 1年約130名 取材日: 2022年12月21日(水)
取材担当: 胡 玉華

※インタビュー形式の記事です。

どんな授業か？

- まず、ご担当されている科目を簡単にご紹介ください。

僕が担当している本授業は、英米学科1生に開講する科目で、映画・文学・演劇の入門コースとして、人間の文化的生活がどのように分析されるかに焦点を当てます。コース全体を通して、人間がどのように生きるべきか、或いは人間の考え方や社会のあり方をどのように改善すべきかについて、指示や指針を与えるものです。



どんな工夫をしているか？

- 受講生から好評を受けている授業なので、教員として、どんな工夫をなさっていますか。

受講生が100~150人と多く、すべて英語で行われるので、授業にメリハリをつけることを心がけています。

例えば、90分の授業に5~15分程度のエピソード時間を設け、パワーポイントや映像クリップを用いた説明や、学習内容に関連した面白いトーク、小グループでのディスカッションなどを行い、濃密な英語での講義に集中した後の疲れをとることが狙いです。また、授業の終わりに、主な授業内容を書き留めたシートの提出を求めますが、受講生がプレッシャーを感じ、不安を生み、ひいてはクラスの雰囲気や学習プロセスに悪影響を及ぼすことを避けるため、このシートはあくまで「形成的評価」として扱い、成績評価にしないことを明確にしています。このシートには質問やコメントを書き込む欄もあり、翌週の授業開始後、教師が特色のあるものを選び読み上げ、洞察に満ちたコメントや的確な質問に対しては、受講生から称賛の声があがります。

- なるほど、だから、「雰囲気がいつも良く、明るく、ハッピーである」と学生がこの授業を評価していますね。

メリハリのある主動的学習を求めるため、科目全体を通して、準備ありと準備なしの2タイプのディスカッションを実施しています。準備ありのディスカッションでは、1週間前に、話題を決め、講義で紹介された言語・語彙や考えを用いて準備するように指示し、学生に講義の内容を消化する、自分の考えや洞察を洗練・構成する時間を与えます。準備なしのディスカッションでは、学生にまだ鮮明に覚えている講義の内容を用い、話す機会を提供します。どちらの形式も、有益で楽しい学習時間となります。

- 2タイプのディスカッションを交互に取り入れているんですね。いいアイデアですね。今度、私自身の中国語の授業でやってみたいと思います。教室活動のほか、工夫されていることはありますか。

主に教材の改善を継続的に行っていることです。例えば、4年前から使っている教科書は、毎年、補足説明や映像・文学の抜粋などについて改訂しています。また、前年度の学生の反応、学習効果をみて、次年度に教材としての映像や文章を取捨したり、導入方法を変更したりしています。

- 先ほどのお話に「形成的評価」が触れましたが、この科目の「総括的評価」はどうされていますか。

学習実績として、学期末の小論文をもって評価します。講義の内容・スタイルと評価方法の間にギャップのないようにルーブリックを設計、事前に「オープン」することを通して、学生の英語力を伸ばしながら、積極的かつ自主的に講義内容を探求することが期待されます。

授業改善に対する、二つの信念

- 中国語によるコミュニケーション活動を実施する時に、確かに、ループリックを採用した評価の効果を実感しております。最後になりますが、実は、ここ数年、FD 委員を務めておりますが、先生方に取材する時に感じたことで、授業改善の努力ができたのは強い信念が支えているからです。この点について、ヘイルズ先生はどう思われますか。

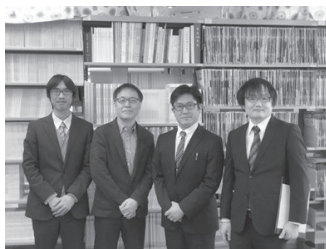
同感です。僕自身は2つの信念を持っています。

一つは、学生に学習内容を理解させるために、教師はあらゆる努力を払わなければならないということです。言い換えれば、学生の講義内容の理解や授業中の活動の参加、授業後の宿題の取り組みなどを妨げるすべての障害に対処することは教師の責任です。例えば、学習内容をわかりやすく提示することや、90 分の授業時間内にタイミングを計りながら、一連の活動を展開させること、授業終始学生の気分やエネルギーを適切に保つようにコントロールすることです。

二つ目は、教師は、常に自分の教育実践に対して「謙虚で自己批判的 (honestly sceptical)」でなければならないということです。つまり、教師は、指導と学習のすべてがうまくいっていることを過剰に信じてはいけません、素直かつ謙虚な心をもって、大小に問わず個々の成功や失敗を細かく注意するのです。いわば、懐疑的な態度は改善を可能にするのです。

- これらの信念は効果的な授業改善につながっていると思います。今日、いろいろとご教示いただき、ありがとうございます。

どういたしまして。(了)



経済学、経営学、会計学、情報科学を横断してビジネスを理解する。

畔津憲司 准教授（経済学部経済学科）、浦野恭平 教授（経済学部経営情報学科）、齋藤朗宏 准教授（経済学部経営情報学科）、市原勇一 准教授（経済学部経営情報学科）

担当「経済学特殊講義A」 履修者：3年生27名、4年生19名

取材日：2022年11月7日（月）

取材担当：市原勇一

どんな授業か？

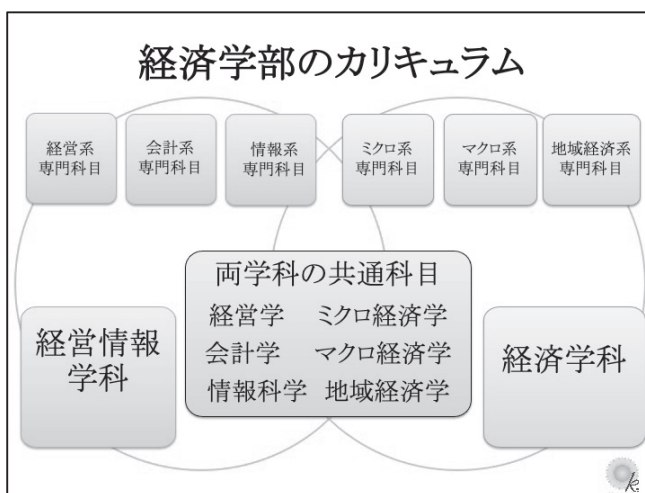
この授業では、近年注目されている企業・団体が展開するビジネス事例（具体的にはコマツ、Amazon、Spotify、オムロン）を取り上げ、ビジネスの仕組みを検討します。ビジネスの仕組みを理解するためには、経済学、経営学、会計学、情報科学といった様々な学術領域の知識、視点、分析手法が必要となります。そのため、経済学科と経営情報学科からそれぞれを専門領域とする複数の教員で授業を担当しました。

この授業は、学生がこれまで学習してきた各領域の基礎を応用して、現実のビジネス事例を検討する力の獲得を目指します。また既存のビジネス事例の理解を通じて、新しいビジネスの仕組みづくりの着想を得る力の獲得も目指します。

授業の特徴は？

経済学部のカリキュラムの特徴のひとつに、経済学科、経営情報学科のいずれの学生も経済学、経営学、会計学、情報科学の4つの領域の基礎知識を修得することが挙げられます。これら4つの領域の融合については、これまで演習系科目や一部の講義系科目では取り組みがなされていたものの、これを明確に意識した講義系科目はあまりありませんでした。この授業では、これら4つの領域の融合を強く意識している点が大きな特徴です。

また、学科や専門領域の異なる4人の教員がそれぞれの専門領域における最先端の事例・テーマを取り上げて授業を行う点も特徴のひとつです。コマツのDXやオムロンの統合報告書といった最新のビジネス事例、Amazonのプラットフォーム・ビジネスやSpotifyのリコメンド機能といった学生にも馴染み深いビジネス事例を取り上げ、学生がこれまでに学習してきた知識が実際のビジネスにおいてどのように活用できるのかを考えやすくなるよう、工夫されています。



この授業でどんな知識やスキルが身に付くのか？

まず、学生が学習している経済学、経営学、会計学、情報科学の知識が単なる机上の空論ではなく、現実のビジネス課題と結び付いていることが理解できます。学生は、授業中のディスカッションや課題を通じて、授業で取り上げられた事例以外にどのような事例に当てはまるのかを考えることで、修得した知識を実際のビジネスに応用する力を身に付けられます。

加えて、この授業で得た知識をふまえて、「もし自分が起業するなら、どのようなビジネスを行うのか」を考えることで、新しいビジネスを構想する力も得ることができます。

得られたFDに関する知見について

この授業では、各専門領域の最先端の事例・テーマが紹介されています。学生にとっては少し難易度が高かったかもしれませんが、各教員が自身の専門領域について楽しそうに授業をする姿は、学生が各専門領域に興味・関心をもつ大きなきっかけになるのではないかと思います。また、授業を担当した一教員としても、他学科、他領域の先生の授業を聴講できたことは非常に学びが大きかったです。授業の全体設計や教員間の調整についてはまだまだ課題もありますが、このような学科・領域を横断する講義系科目の必要性を改めて認識する機会となりました。



実践を通して外国人住民と日本社会について考える

吉田舞 准教授(法学部政策科学科) 担当「政策実践プロジェクトI」 履修者:2年生2名

取材日:2022年11月19日(土)

取材担当:岡本舞子

どんな授業か？

この授業では、「外国人住民と日本社会」をキーワードに、日本で暮らす外国人にかかわる政策や支援活動、地域レベルの取り組みについて考察します。抱きかかえ科目の演習Ⅰでは、日本の入管政策や労働政策について文献講読を行い、本授業では、それらが「現場」でどのように運用され、当事者にどのような影響を与えているのか、フィールドワークを通じて、実態や課題について考えます。具体的には、北九州市内の技能実習生の支援者ネットワークの定例会への参加や、市民センターでの多文化共生イベントを学生が企画・実施します。また、学期末には、広島でのフィールドワークも実施し、国際交流イベントへの参加や、支援団体や行政へのヒアリングを行います。



授業の特徴は？

この授業では、様々なフィールドワークが行われていますが、今回は、ゼミと高須市民センターが共同で開催する国際交流イベントを参観しました。このイベントは、日本に住む外国人と地域住民、大学生が交流する機会を作ることで、日本に住む外国人の方の「居場所」を作りたいという趣旨で企画されたものだそうです。イベントの企画内容は、学生が考え、企画の準備、広報用のチラシの作成、当日の司会進行も、学生が行います。今回は、絵かると和太鼓のパフォーマンス&体験会が行われました。企画内容は、外国人の方でも楽しめるような企画内容を学生が考え、絵かるとに決定し、ひらがな・ローマ字・絵が描かれた絵かるとを、学生が作成したそうです。当日は、小学生くらいの子供からシニア世代まで幅広い年代の地域住民の方やALTの先生など、約40名が参加されていました。当日のイベントでは、学生が、主体的に進行し、参加者への声掛けを行っており、先生は、学生の進行を見守る形で、進められていました。学生にお話をお聞きしたところ、イベントの企画・運営をするのは、はじめてとのことでしたが、しっかりと司会をされ、イベントが進むごとに参加者と積極的に交流を図っていく姿が印象的でした。

この授業でどんな知識やスキルが身に付くのか？

この授業では、フィールドワークを通じて、日本に住む外国人の中でも様々な人がいることをまず感じるということを大事にされています。さらに、座学と実践を組み合わせ、入管政策や外国人労働者に関する労働政策について知識を修得しつつ、フィールドワークで、外国人住民をめぐる多様な側面を知ること、実態を踏まえて政策を検討する能力が身に付くでしょう。また、国際交流イベントは、学生が主体となって企画を立案し、運営しており、企画立案能力や主体的に行動する力、多様な人たちとコミュニケーションを取る能力も身に付くと思います。

得られたFDに関する知見について

吉田先生は、フィリピンでのフィールドワークを積極的に行われており、日本における外国人コミュニティとのつながりも深く、そうした研究活動を通じて築かれてきたネットワークや専門的知見を活かして、この授業では、充実したフィールドワークが行われています。学生は、この授業を通して、非常に貴重な経験がたかさんできていると感じました。研究活動の教育への還元モデルケースとなる授業だと思います。



ICT を使って反転授業に挑む

藤田慎之輔 准教授(国際環境工学部建築デザイン学科) 担当「建築構造デザイン」

履修者:3年20名 取材日:2023年1月20日(金)

取材担当:柳川勝紀

※インタビュー形式の記事です。

どんな授業か？

- ー 本日は、先生がご担当の講義「建築構造デザイン」を中心にお尋ねしたいと思います。まずは、こういった目標設定の講義なのでしょうか。

「構造」と「デザイン」とで言えば、どちらかというと後者に重きを置いた内容です。もちろん、ところどころで構造力学の考え方を入れ込んだ講義になりますが、数学が不得手な学生にその苦手意識を取り除いてもらって、計算をできるだけ使わずにデザインというものを学んでもらうところから始めたいと考えています。

どんな工夫をしているか？

- ー この講義では、反転授業に積極的に取り組んでいると伺いました。具体的にはどのような取り組みでしょうか。

まず、学生には動画を視聴してもらって、そのコメントを翌日までにしてもらいます。頂いた学生のコメントには全てフィードバックとして講義日の前日までに返答をしています。講義日にはコメントや返答の紹介、補足説明をしています。また、成績評価は最終課題発表会としてプレゼンテーションを課しています。この課題発表のために必要なツールについて紹介や説明も対面講義でおこなっています。

- ー 学生が動画を見ているかはどうやって判断しているのですか。

コメントの内容で概ね判断できますね。また、動画をしっかり見ていない学生を抽出できるよう、ところどころで仕掛けを入れるようにしています。

- ー 反転授業にはいつから取り組むようになったのでしょうか。

今年度で2年目です。昨年度は講義日を「質問対応時間」という形で抽象的に設定したのですが、それが良くなかったと反省しています。最初の方は教室に来る学生がいたのですが、次第に減っていき、ほとんど誰も来ない日もありました。最終課題の提出前には参加学生が再び増加しました。他の講義でもそうなのですが、しっかりと質問に来る学生は最終的には成績が良く、落単の学生はいませんでした。一方で、質問に全く来ない学生については、小テスト等の成績が良く、質問の必要のない習熟度の高い学生と、習熟度は低い質問に全く来ない学生に2分され、後者の中には期末試験や最終課題で合格点に達しない生徒もいました。

- ー 学生の反応はいかがでしたか。

残念ながら、今年は受講者数が減りました。学生にもそれなりの負担がかかることが要因かもしれません。ただ、習熟度、特に課題のプレゼンテーションが大きく向上しました。今年是对面講義＝質問対応時間という形式をやめたことに加え、課題発表に必要なツールについて紹介する時間を設けたことが大きいと考えています。学生からのアンケートでもその時間を増やして欲しいという要望があり、来年度に向けてバランスを検討中です。

更なる授業改善に向けて

- ー 今後も授業改善を継続されるのですね。さらに変更しようと思っていることはありますか。

講義系科目については、その内容がオンデマンドでいつでも聴講可能なこと自体は学生には好評なので、従来の対面授業だとしてもそれを動画化して公開することは続けようと思っていますが、以前のFD研修を受けて、反転の仕方をもう少し

再考し、アウトプットはなるべく対面で行うように再設計するつもりです。

個人的には、授業内容をしっかりと自分で理解できる学生は必ずしも授業に出席する必要はない（その時間は他のことに使してほしい）という思いがあり、私の担当科目のいくつかは、出席は一切取らずに期末試験あるいは演習課題一発勝負で成績を付けていますが、反転させる場合には、原則として出席してもらうようにし、基本的には習熟度の低い学生を底上げする機会としつつも、習熟度の高い学生が暇にならないように1つレベルが上の演習を課すなどして、モチベーションを引き上げる工夫が必要だと感じます。

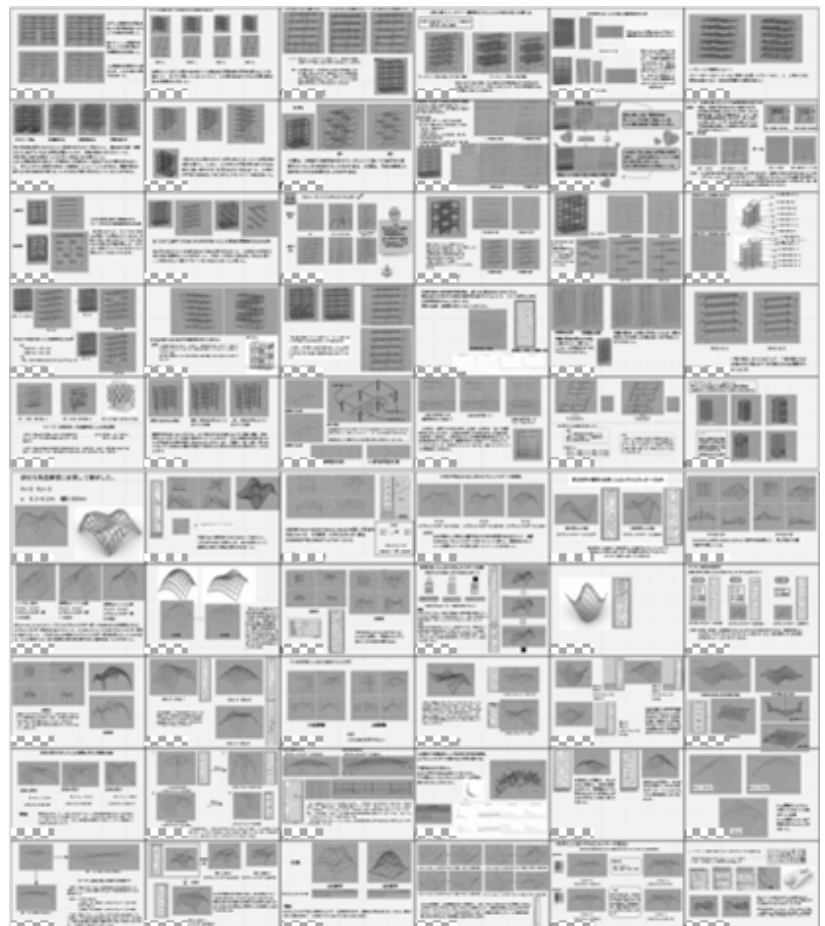
ー 反転学習をする上でおすすめのツールがあれば教えてください。

コロナ禍で始めた試みとしては、**notion** と呼ばれるサービスを使った web レジューメや、演習時に **miro** と呼ばれるオンラインホワイトボードを使い、学生の反応に合わせて臨機応変にレジューメを更新したり、学生の課題の進捗情報をオンラインホワイトボードで互いに可視化することなどがあります（下図参照）。後者は学生の習熟度をリアルタイムに確認できるので演習で学生の席を回る際に声掛けがしやすくなりました。また、いずれもアカデミック版がフリーという点は魅力的です。



ー 将来的にはどのような講義をしていきたいですか。

手書きの計算から、デジタル技術による数値シミュレーション等を取り入れた講義に少しずつ置き換えをしていきたいと思っています。昨年度から学科推奨 PC 仕様を統一して提示したことは非常に良かったと思っています。教授会でも、中期計画において数理、デジタル、AI 人材育成に向けたカリキュラム見直しという話が出てきていたと思いますが、ノート PC を持参してくるのが当たり前という前提で、座学とプログラミングを反復する（そして例えば前者はオンデマンドでインプット、後者は対面演習）ような講義にアップデートできればと考え、次のカリキュラム改変へ向けて同じ講座の城戸先生や保木先生と議論を始めたところです。ただ、殆どの教室にはコンセントがほとんどないため PC の充電ができないというハード面の問題や、ネットワークセキュリティの問題（AR/VR/MR 技術を駆使した講義を展開するためにはゲームエンジンが必須であるが、学内のネットワークからはアクセスできない仕様になっている）や、PC 持参を必須としてよいかどうかという経済的な問題などがあり、移行はすぐには難しいと感じています。今、日本建築学会の「デジタル・グローバル建築教育研究の環境整備に関する特別調査委員会」という委員会の幹事を務めており、同様の議論を他大学の先生方と交わしているところです。そこでの議論も踏まえつつ、次回のカリキュラム改変に向けて少しずつ意見出しをしていきたいと考えております。（了）





車椅子ソフトは、障がい者との共生を育むために生み出されたスポーツ

山本浩二 准教授(地域創生学群) 担当「地域創生実践Ⅰ・Ⅲ」 履修者:2年16名・3年15名 計31名

取材日:2022年9月2日(金)6限

取材担当:見館好隆

どんな授業か？

本授業は「車椅子ソフトボール(以下、車椅子ソフト)」を通して、障がい者との共生を心と身体全体で学ぶことが目的です。車椅子ソフトは、競技用の車椅子に乗り1チーム10名で行うベースボール型のスポーツで、野外で行われる団体競技では数少ない障がい者スポーツ。発祥はアメリカで、約44年前から全米選手権が行われており、レッドソックスやカブスなどメジャーリーグチームのサポートを受けて運営しているチームもあります。日本では、2012年にアメリカで開催されたワールドシリーズに向けて日本代表チームを結成したのがスタート。2013年には一般社団法人日本車椅子ソフトボール協会が発足、同年には第1回全日本車椅子ソフトボール選手権大会が北海道で行われ、現在では全国22チームが活動し、現在ではパラリンピックの正式種目を目指しています。なお、国際大会ではメンバー全員が障がい者ですが、日本では障がい者と健常者、男性、女性、年齢においても分け隔てなく誰もが一緒に同じフィールドで楽しむことができるバリアフリーなスポーツとして、普及・発展を目指しています。なお、山本先生は日本代表チームの監督に就任し、2022年ワールドシリーズ(シカゴで開催)で優勝しました。



授業の特徴は？

本授業の特徴は、地域の障がい者の皆さんと一緒にやる点に尽きるでしょう。5限から学生は集まって車椅子など備品の準備をし、試合に出る学生は車椅子に乗って練習をはじめ、6限に10名弱の障がい者の皆さんをお迎えし、一緒にストレッチからスタート。そして学生も車椅子に乗って鬼ごっこやキャッチボール、ノックをして身体を慣らし、紅白戦が始まります。なおゼミ生は4つのグループ(授業の企画運営、広報活動、大会準備や道具整備、審判や練習企画)に分かれて活動していました。

車椅子ソフトがダイバーシティを育成する仕組みは「クラス分け」。クラス分けとは、選手の障がいレベルでクラスに分けられ、チーム10名で21点以内に抑える制度(頸椎損傷者またはそれに準ずる上肢に障がいがある場合はクラスQ(0点)、腹筋や背筋の機能が無いもしくは弱く座位バランスが悪い場合はクラスI(1点)など。健常者は3点)。健常者のソフトボールなら当然「最も上手な選手」が選ばれますが、車椅子ソフトは様々な障がいを持つ人でメンバーを組む。つまり、必ずメンバー全員が、メンバーそれぞれの障がいを正しく理解し、戦略を考え、支え合うことが原則となります。あと、車椅子ソフトは、健常者より障がい者の方が上手である点も特徴です。私も一度打席に入って打たせてもらいましたが、打球が内野を越えても1塁に行くまで時間がかかり、簡単にアウトになりました。つまり、車椅子に乗り慣れている人の方が圧倒的に有利。この点も健常者と障がい者が同じ目線で交流できる土台になっていました。また、本日参加されていた元日本代表選手の岸川さんは「今まで接点がゼロだった大学生と練習できること自体が新鮮で楽しい」とおっしゃっていました。地域の障がい者のみなさんが喜んで参加していただき、健常者の大学生がダイバーシティを心の底から理解できる授業であることを実感しました。

この授業でどんな知識やスキルが身に付くのか？

本授業の目的、ダイバーシティが身につけていることが良くわかるシーンを、本日何度も見ました。それは、練習試合中に障がい者の選手が転んだ時に、多くの学生が素早くフォローアップしているシーンです。私たちは日常生活において、障がい者を支援することの重要性をわかってはいても、あの速度で支援は普通できません。その転んだ障がい者がどんな障がいをお持ちで、どんなことが苦手で、何を求めているかを知っているからこそできる行動なのです。また、4年生のゼミ生にこの授業での学びを尋ねると、「私は今まで障がい者を支援する対象とみていた。しかし、本授業でそれが覆された。障がい者の皆様と交流することで、身体の機能の一部がうまく動かないから、話すことも含めて苦手な



だけで、健常者と変わらないことの方が多いことを知った」と教えてくれました。なお、彼は本授業での学びを活かし、体育会学生専門の採用支援会社へ入社することが決まっており、将来はパラスポーツ経験者の就職を支援する仕事をしたいと語ってくれました。ダイバーシティが心の底から身に付き、その学びが卒業後のキャリアに繋がっていることが良くわかりました。

得られたFDに関する知見について

取材して気づいた特徴は、地域の障がい者の皆さんと一緒にやる点。5限から学生は準備や練習を始め、6限に10名弱の障がい者の皆さんをお迎えし、ストレッチや鬼ごっこ、キャッチボール、ノックを経て、紅白戦を行います。なおゼミ生は4つのグループ（授業の企画運営、広報活動、大会準備や道具整備、審判や練習企画）に分かれて活動していました。車椅子ソフトがダイバーシティを育成する仕組みは、様々な障がいを持つ人でメンバーを組むため、メンバー全員がメンバーそれぞれの障がいを正しく理解し、戦略を考え、支え合うことで、健常者の大学生がダイバーシティを心の底から獲得できる授業であることがわかりました。

第 5 章

FD 委員会について

(1)活動概要

今年度、FD 委員会に設けられた 3 つのワーキング・グループ（以下、WG）の活動は以下の通りである。

研修 WG では、本学におけるアクティブ・ラーニングの推進、事前事後学習の確保、教育アセスメントの実施を主な目的に掲げて、全学研修を 4 件実施した。①「春季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、4/8 開催）、②「夏季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、8/18 開催）、③第 1 回全学 FD 研修「対面授業再開を受けた学修行動と学生生活の経年比較」（対象：全教員・必修、9/22 開催）、④第 2 回全学 FD 研修、第 1 部「FD 活動を学内外へ可視化する試み」、第 2 部「『環境問題事例研究』での取組」（対象：全教員・任意、3/1 開催）の計 4 件の研修の企画・実施を行った。これらの研修の報告は以下のページに示す「研修報告」を参照されたい。

FD 活動広報 WG では、新しいスタイルの特集として、従来の FD 活動広報 WG の教員の人脈でピックアップした授業ではなく、FD 活動広報 WG の教員が所属する学部・学群長へ依頼する形で、魅力的な授業を選出し取材を行った。次いで、ピアレビューを「読み物」にして可視化・発信をすることで、学内教員の FD のノウハウの更なる共有、および本学 FD 活動の学外への発信を目指す試みを地域創生学群の web サイトにて行った。また、このピアレビューの可視化について、他部局も導入を検討して頂くことを目指した。最後に、FD 活動報告書の表紙を雑誌風に改善し、少しでも FD 活動が特に学内にて共有されることを目指した。

授業評価 WG では、昨年度に整理された授業評価アンケートの質問項目を元に、今年度も着実に授業評価を実施してきた。その遂行に当たって、アンケート実施期間の微調整、現 Moodle システムにおける過去のアンケート結果を「表示」に切り替え、集中講義（夏休み期間）の授業評価の取り扱いについて検討するなど、適宜対応した。また、2022 年度までの授業評価アンケートの結果公開については、情報総合センターに公開準備を進めてもらっている。2023 年度からは、新学務システムの移行に伴って、授業評価アンケートをどのように実施するのかについて検討を重ねた。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。

(2)活動一覧

<FD 委員会>

日程	回	内容
4 月 27 日 (Web 会議)	第 1 回	【議題】 1. 委員構成について 【報告】 1. 2022 年度 春季新任教員研修実施報告 2. 2022 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 3. 大学教育学会第 44 回大会について 【その他】 1. 2022 年度 FD 委員会開催予定
6 月 15 日 (Web 会議)	第 2 回	【議題】 1. 各 WG の進捗について 2. 2022 年度 1 学期授業評価アンケート実施について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告書作成について 2. 図書購入希望について
8 月 3 日 (Web 会議)	第 3 回	【議題】 1. 2023 年度 FD 活動の推進予算（案）について 1. 2022 年度 夏季新任教員 FD 研修の実施について 2. 2022 年度 FD 研修実施について 【報告】 1. 各 WG の進捗について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告書作成について（再掲） 2. 図書購入希望について（再掲）
10 月 26 日 (Web 会議)	第 4 回	【議題】 1. 各 WG の進捗について 【報告】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告 2. 2022 年度 夏季新任教員 FD 研修実施報告 3. 2022 年度 第 1 回全学 FD 研修(必修)実施報告 【その他】 1. 図書購入について
11 月 16 日～ 11 月 24 日 (メール会議)	第 5 回	【審議事項】 1. [FD 活動広報 WG より] 本学の FD 活動を、各部局の web サイトに掲載する試みについて
2 月 15 日 (Web 会議)	第 6 回	【議題】 1. 各 WG の進捗について 2. 2022 年度「第 2 回全学 FD 研修」実施について 【報告】 1. 2023 年度 FD アドバイザーについて 【その他】 1. 2 学期ピアレビュー実施報告書の提出について 2. 年間ピアレビュー報告書の提出について 3. 2022 年度 FD 活動報告書の提出について 4. 2023 年度 FD 活動計画書の提出について 5. 2023 年度全学 FD 研修企画提案書の提出について

3 月 22 日 (Web 会議)	第 7 回	【議題】 1. 各 WG の活動状況について 2. 2023 年度春季新教員研修について 3. 2022 年度 FD 活動報告について 4. 2023 年度 FD 活動計画について 【報告】 1. 2 学期ピアレビュー実施報告
----------------------	-------	---

< 研修・講演会等 >

日程	項目	講師等
4 月 1 日 4 月 8 日	春季新任教員 FD 研修 (制度研修、FD 研修)	竹中 喜一 (FD アドバイザー)
8 月 18 日	夏季新任教員 FD 研修	竹中 喜一 (FD アドバイザー)
9 月 22 日	第 1 回全学 FD 研修 (必修研修) 「対面授業再開を受けた学修行動と学生生活の経年比較」	8 ページ参照
3 月 1 日	第 2 回 FD 研修 第 1 部「FD 活動を学内外へ可視化する試み」 第 2 部「『環境問題事例研究』での取組」	10 ページ参照

(3) 委員構成

2022年度のFD委員会は委員長1名、副委員長1名、委員16名、アドバイザー1名で構成される。

役割	氏名	所属	職名
委員長	柳井 雅人	経済学部経済学科	教授
副委員長	後藤 宇生	経済学部経済学科	教授
委員	齊藤 園子	外国語学部英米学科	准教授
委員	胡 玉華	外国語学部中国学科	教授
委員	李 東俊	外国語学部国際関係学科	准教授
委員	畔津 憲司	経済学部経済学科	准教授
委員	市原 勇一	経済学部経営情報学科	准教授
委員	梶原 将志	文学部比較文化学科・社会システム研究科	准教授
委員	山下 智也	文学部人間関係学科	准教授
委員	岡本 舞子	法学部法律学科	講師
委員	黒石 啓太 (1 学期)	法学部政策科学科	准教授
委員	田代 洋久 (2 学期)	法学部政策科学科	教授
委員	見舘 好隆	地域戦略研究所 (地域創生学群)	教授
委員	山崎 進	国際環境工学部情報システム工学科	准教授
委員	柳川 勝紀	国際環境工学部環境生命工学科	准教授
委員	高木 駿	基盤教育センター	准教授
委員	マーフィー ロバート	基盤教育センター	准教授
委員	村江 史年	基盤教育センター (ひびきの分室)	准教授
委員	高橋 秀直	マネジメント研究科	准教授
アドバイザー	竹中 喜一	FD アドバイザー	准教授

2022 年度 北九州市立大学 FD 活動報告書
2023 年 3 月発行

編集・発行 北九州市立大学 FD 委員会

〒802-8577

福岡県北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号